

旧制文学部の香り

鈴木将史

私が助手として広島大学文学部に赴任したのは平成元年四月のことである。従って私の場合、在職年数を計算するのにすこぶる都合がよい（だが、それも来年までである）。文学部が助手を公募すること自体珍しかったのだが、赴任してみると果たして二十人いる助手の内、私だけが学外出身者であった。ことほどさように当時の広大独文はりべラルだったわけで、研究室の雰囲気は、戦前から続く国文学や国史学と較べ、非常にフランクなものであった。（在外研究で不在にしている教官の研究室を、学生が使用したりしていた）私は北大から赴任したわけだが、戦後文系学部を設置した北大と、戦前の高師、文理大の伝統を受け継ぐ広大では、文学部のたたずまいそのものが違っており、東千田町のキャンパスではレンガ造りの理学部と並んで、文学部が堂々たる存在感を有していた。「法学部と経済学部は図書館と文学部を結ぶ渡り廊下に作られた」などと揶揄されたものである。学部内にもそここ

こで伝統が顔を覗かせており、先の「国史学」（教室看板は「國史学」というネーミングも私には驚きであったし、倫理学講座の母体が戦前の「国体学専攻」であったと聞かされた時には、軽いショックを覚えた。会議も、助手以上の全教官が出席する「教官会」、講師以上が対象の「第二教授会」、教授のみで開かれる「第一教授会」と分かれており、重要な案件はほぼ第一教授会で審議されていた。ただ、私が赴任した前々年、広大では国内を震撼させた、助手による学部長刺殺事件（所謂「黄色い砂事件」）が起きており、助手の処遇を巡り大学全体に緊張感が漂っていた時期である。文学部でも「助手会」が結成され、リーダー格の助手が学部長を糾弾するなど、教官会は度々紛糾した。何のしがらみもない外様の私は、独文助手としてさしたる苦勞もせず、のほほんと暮らしていたが、研究室によつては当時ベストセラーとなった「文学部唯野教授」もかくやとばかりの職場環境に悩む者もいた。ついこの間まで助手会の中心メンバーとして教授会を批判していた人が、突然批判しなくなったので妙に思っていたら、翌年講師に昇格したなどという、人間の弱

さも垣間見た会だった。結局、それまでは「紳士協定」に留まっていた助手の任期制が、この事件をひとつの契機として制度化されていったのではないかと考えている。

当時の広大文学部ドイツ語ドイツ文学講座は先述したとおり、極めて自由で「開かれた」研究室であり、主任教授の好村富士彦先生は市民の参加する研究会を自室でしばしば催されていた。私は三ツ木道夫先生の後任として二年間勤務したが、丁度赴任前の二年間を過ごしたミュンヘン留学と同じように、広大でも快適な研究生を送ることができた。私はミュンヘン時代に書いた論文一本で広大に採用され、次に広大時代に書いた論文一本で現本務校に採用されたと思っただけで、他の時期に書いた論文はまあこれすべて凡作である。なので、広大時代は私にとって、学術的にも（そして生活的にも）かけがえのない時期となっている。ただ一点、暑さと湿気には閉口した。広島では夏、夕方のひと時に風が全く吹かなくなる「なま風」という現象が起きる。この時の暑気が、北国育ちの私にはかなり応え、二年で退散したのも致し方ないところであっ

た。しかし風をやり過ごした夕刻に京橋川沿いを散策したり、鷹野橋でビールを飲んだりするのはまた格別で、とりわけ広島市民球場に気軽に足を運べることに関しては、スポーツ娯楽レベルの違いを痛感した。札幌でプロ野球を見るというのはひと苦労で、特に巨人戦に至っては徹夜で並ばなければ切符が買えなかったが、ここでは当日券で巨人戦を観戦できてしまう。広島市民のカープ愛は周知のごとく強烈で、はるかに人口が多い札幌に対して「札幌にやあ球団がないけんう」と、見下していた感もあった。日ハムを誘致した今、札幌も野球先進地域の仲間入りを果たしたが、試合が始まると至る所でカープの戦況が分かったり、翌朝タクシーに乗れば、開口一番「昨日はいけんかったのう」と運転手がつぶやく広島島の球団密着度に札幌はまだまだ及ばない。今、日ハムには本拠地移転話が持ち上がり、このままでいくと北広島市に移ってしまいうような心配だが（何と北広島は札幌の隣にある）、学校帰りに学生と「カープうどん」をすすりつつ観た野球が懐かしく思い出される今日この頃である。

（小樽商科大学教授）